広島市における小児がんの罹患・死亡・生存率

杉山　裕美*　　西　信雄　　笠置　文善　　木矢　克造
有田　健一　　安井　弥

１．目的

広島市におけるがんの罹患統計については、これまで広島市地域がん登録および広島県腫瘍登録データに基づき部位別に報告されてきたが、小児がんだけを取り上げて検討されたことはなかった。今回われわれは、広島市における小児がんの実態、すなわち罹患・死亡・生存率について解析したので報告する。

２．対象と方法

1998～2000年までの広島市における小児がんの以下の統計について検討した。

(1)　罹患・生存率

広島市地域がん登録および広島県腫瘍登録に登録された小児がん症例63例を対象とした。対象は、①診断時住所が広島市、②診断時期が1998～2000年、③悪性、④第１原発がん、⑤診断時年齢が0～14歳、の条件を満たすものとした。死亡票のみで登録された症例（DCO: Death Certificate Only）は1例（1.6%）であった。

通常、地域がん登録の集計では、国際疾病分類（ICD: International Classification of Disease）が用いられることが多い。しかし、小児がんは様々な部位、また様々な組織型が発生するため、国際小児がん分類(ICCC: International Classification of Childhood Cancer)が用いられる。本解析では、ICCC第3版を用いて、12の診断群に分けて罹患数、率を算出した。

また、小児がんにおける治療、すなわち手術療法、放射線療法、化学療法の施行割合について検討した。

広島県では、1998年から人口動態死亡票の目的外利用の認容を得て、死亡小票を入手している。すべての症例は全死亡と照合し、2006年7月までの追跡が完了している。DCOを除いた62例を対象として、5年実測生存率と5年相対生存率を算出した。

(2)　死亡

広島県が入手している人口動態統計の情報を用いて、1998～2000年までの原死因ががんの死亡例を対象とした。原死因はICD第10版（ICD-10）コードが付与されているため、がんの分類にはICD-10を用いた。

３．結果

広島市における小児がん63例のうち、56例（88.9%）は広島市地域がん登録に登録されており、29例（46.0%）は広島県腫瘍登録に登録されていた。また、広島市地域がん登録、広島県腫瘍登録のどちらにも登録されていたのは23例（36.5%）であった。

(1)　罹患・生存率

広島市における小児がんの罹患数は、1998年が24例、1999年が21例、2000年が18例と、3年を通して20例前後であった。1998～2000年までの罹患率は、男児で144.9、女児で94.0（いずれも人口10万対）であった。診断群別にみると、男児ではI.白血病が最も多く12例

*（財）放射線影響研究所疫学部
〒732-0815　広島市南区比治山公園 5-2

（30.8%）であった。次いで、II.リンパ腫および細網内皮系新生物が5例（12.8%）、IV.交感神経系腫瘍（神経芽腫）、X.胚細胞・性腺の新生物がそれぞれ4例（10.3%）であった。女児でも、I.白血病が最も多く7例（29.2%）であった。次いで、III.中枢神経系・頭蓋内・脊髄内新生物とIV.交感神経系腫瘍（神経芽腫）が同じく4例（16.7%）であった。

診断時年齢をみると、63例中12例が0歳児であった（19.0%）。そのうち7例は神経芽腫であり、マススクリーニングにより発見された症例であった。

小児がんにおける治療施行割合を検討した。37例（58.7%）が手術を受けており、8例（12.7%）が放射線療法、39例（61.9%）が化学療法を受けていた。特にI.白血病では19例中17例（89.5%）が化学療法を受けており、神経芽腫の7例では、すべて（100%）が手術を受けていた。DCO症例を除く62例を対象として5年生存率を算出した。実測5年生存率は79.0%であり、5年相対生存率は79.1%であった。

(2)　死亡率

広島市における小児がんの死亡数は、1998年で3例、1999年で6例、2000年で4例の計13例であった。最も多かったのは白血病（ICD10: C91-C95）で8例であった。

４．結語

広島市地域がん登録と広島県腫瘍登録資料に基づき広島市における1998年から2000年に診断された小児がんの罹患・生存率および死亡率について算出した。また小児がんにおける治療の施行割合についても検討した。今後も、地域がん登録に基づき、小児がんについても定期的に観察、報告を行っていく予定である。